ウルリム
響
울림

特定非営利活動法人
聖公会生野センター機関誌
第70号
2019年11月23日発行
題字：康秀峰

URL http://www.nskk.org/province/ikuno　E-mail:nskkikuno@gmail.com　聖公会生野センター　検索

# 「神の国の民」

主教 ナタナエル 植松 誠

今現在、戦後最悪と言われている日韓関係ですが、私はどうしてもそのようには思えません。そのような機運にもっていこうと画策し、扇動する誰かがいて、日韓の関係すべてが悪い方へと向かっているかのような世論操作が、日本にも韓国にもあるように思えます。私が驚くのは、それに踊らされてしまう民衆が、こんなにも多くいるということ。相手の国が、そしてその人々が、聴く耳をもたず、悪意を持って、或いは憎しみや怒りをもって自分たちを攻撃してくるかのような宣伝に乗ってしまう人々に、私は心を痛めています。

日本聖公会と大韓聖公会は、さる8月15日に両首座主教名で出された共同宣言で、両教会のこれまでに築き上げてきた信頼関係や交流は、このようなことで失われたり弱められることはないし、これからも私たちは主から与えられた和解の務めを果たしていくと宣言しています。冷静に、これまでの戦後の長い和解と平和の道のりを思い出してみれば、今の「最悪の関係」の虚像が見えてくると思うのです。日本キリスト教協議会（NCCJ）と韓国キリスト教協議会（NCCK）も、また私が理事長をしている世界宗教者平和会議（WCRP）の日本委員会と韓国委員会も、同じように考えて、今の喧騒に踊らされることなく、地道にこれまでの和解と交流の歩みを今後も続けていくことを確認しています。

しかし、それは、私たちが宗教者（キリスト者）であるということと無関係ではありません。国と国の関係で和平と和解を追求していくのは残念ながら無理だと私は思います。そこには非情な「国益」や絶対に譲ることのできない「国体」があり、軍事、経済などで、少しでも弱みを見せまいと必死になっている政府や政治家がいます。巨費を投じる軍備、相手を困窮させる経済制裁、安保法制などに固執しながら、和平、和解、交流を進めることはあり得ません。

私たちにはそれぞれ属している国の「国民」というアイデンティティはもちろんありますが、それと共に、否、私たちの信仰の上では、それ以上に、神の国の民であるというアイデンティティがあります。「あなたには愛国心はないのか」とか、「あなたの言っていることは平和ボケ（この言葉はよくありませんが、確かにこのように言われます）で、それでは自分の国は守れない」とよく非難されます。しかし、私は、今、このようなグローバルな時代、世界の一点で起きることがすぐ全世界に波及する時代に、また、世界の各地で深刻な問題となっている飢餓、難民など、さらに地球温暖化のような誰も避けて通れない問題がある今、「わが国の安全、わが国の発展・・・」と連呼し、自分の国の安寧や利益を先ず考えることの愚かさを思わざるを得ないのです。そのような風潮に対して、私たちはしっかりと目を開け、耳を澄まし、感性を研ぎ澄ましていなくてはいけないと思います。

（うえまつ　まこと　北海道教区主教　首座主教）

## 特集　＝日韓の歴史をこえて＝

「神の国の民」・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
「日韓の歴史　被害と加害をみつめて」・・・・・2
「『茶色の朝』から思うこと」・・・・・・・・・・3
「日韓、二つの近代・・・・・・・・・・・・・・・4
「マスコミと嫌韓報道」・・・・・・・・・・・・・5
「出会いの力」・・・・・・・・・・・・・・・・・6

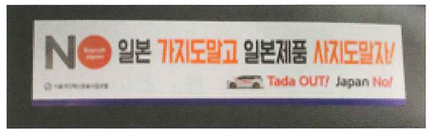
# 日韓の歴史　被害と加害をみつめて

執事 アンデレ　松山 健作

7月末から8月初旬に韓国を訪れた。韓国に訪れると必ず、韓国の母（留学時にお世話になった大韓聖公会の信徒さん）に連絡しないとお叱りを受ける。実の母より厳しい。

今回は、その韓国の母とその家族と一緒に食事をし、有意義なひと時を過ごした。その日は大雨に降られ、「タクシーに乗って帰れ」と言われ、飛び乗った。ふと運転席のシートに目を向けると、「No 日本、行かないでおこう。日本製品、買わないでおこう」というシールが貼り付けてあった。

「あぁ、そういえば今の日韓関係は・・・」ということに改めて気づかされた。最近では「No 日本」から「No 安倍」に変わってきているそうだ。より本質をついていると思う。



写真は「No 日本」のステッカー

私は率直に安倍政権を全く支持できない。そして文在寅政権を支持している日本人である。なぜなら日本政府は、慰安婦の事柄にせよ、徴用工の事柄にせよ、国としてそれら加害の事実に対して、真摯に向き合っていないことが明らかであるからだ。さらに、その事実をマスメディアはほとんど知らせず、むしろ排外主義を煽り立てるだけの政府御用機関に転じている。多くの日本人が苦しんでいる人の声を聞かず、目も向けず、イデオロギーのみによってのみ、マイノリティーを排除する姿は実に嘆かわしい。

私はそんなメディアから離れ、もう3年ほどテレビのない生活を送っている。耳障りなニュースを見なくて済む。その方が精神が安定するからだ。とはいいつつも、インターネット上や新聞では、さまざまなニュースを目にする。

最近韓国メディアで目にしたあるニュースを紹介したい。1965年日韓国交正常化で支払われた「補償金」は、大部分が韓国の経済発展に使用された。しかし、その事業は当時の日本企業が受注し蜜月的な形で還元された。還元されただけならまだしも、日本の市場価格よりも水増しされて、高価な形で工事費や地下鉄の車両などが取引されたということが明らかになった。つまり、一旦は植民地の清算をしたかのように見えるが、実際は日本に甘い汁を吸わせる構造が作り出されていたという指摘である。

この事実は、当時の韓国政府が日本帝国下によって作り出された親日派集団、反共産主義者、独裁主義者であったため、慰安婦や徴用工などの真相究明や誠実な清算がなされなかったとしても、何ら不思議ではない。そのような意味ではこれから両国の歩みによって、犠牲者に対する丁寧な清算がなされなければならないだろう。その一端が徴用工を巡る裁判として現れたと私は見ている。

今回の日韓関係の悪化は、韓国から日本への植民地加害の問い直しが根底に潜んでいると考えている。日本は政治的に「解決した」の一点張りである。しかし、加害によって多くの尊い命を蹂躙したことへの真摯な謝罪を継続する姿勢が全く見えないことが真の問題である。人の命を奪う、人生を奪うということについて軽視する国が日本である。軽視ゆえに、同時に日本における在日マイノリティの生存権は、今尚強烈に脅かされている。

私たち日本は、隣国韓国から命に関する尊厳性について問いを投げかけられている。それは100年前に3・1独立運動において、日本社会が朝鮮から恒久平和への誘いを受けたことと同様である。しかし、日本帝国は当時、武力によって朝鮮の民を弾圧した。二度と繰り返してはならない。このような時にかつての事柄を悔い、犠牲者の視点、マイノリティの視点から命の尊厳性について互いに再度歩みたいものである。

（まつやま・けんさく
聖光教会牧師補、聖光幼稚園園長）





# 『茶色の朝』から思うこと

ミリアム　増山 悦子

「増山さん、ウルリムの編集委員をやってくれませんか？」

ある日、聖公会生野センターで呉光現総主事に声を掛けられた。ウルリムは勿論知っていたが、「私が編集？とんでもない！」と内心思った。

「記事を書くんじゃなくて、原稿を依頼したり記事をまとめたりするだけやから」

そう言われたら断る理由が思い付かず引き受けてしまった。ところが、私が関わるようになってわずか2誌目で、「この記事は増山さん、書いてくれませんか」。話が違う！と思ったが、これも断る理由が思い付かず締め切りが決められた。

「10分で読めますよ」と手渡された本は確かにサイズも小さく薄いし、中はカラーイラストも多い。だが先ずタイトルだ。『茶色の朝』、この茶色とは？本の作者はフランス人で、フランスで茶色と言うと大戦時のナチスの軍服を彷彿とさせるらしい。登場人物は「俺」と友達の「シャルリー」だけで、世間が徐々に茶色化していくことに違和感や不満、脅威すら感じつつも、何の声も上げられず仕方なく従っている。

飼い猫も飼い犬も「ペット特別措置法」によって茶色でなければならない。読む新聞は「茶色新報」、聞くラジオは「茶色ラジオ」と国の法で決められ、息苦しさを感じつつも、「法なんだから仕方がない」「法の網をかいくぐったりしても、何の得にもならない」「街の流れに逆らわないでいれば、安心が得られる」と、あれこれ理由を付けて納得のいかぬままに日常を送り続ける。

そしてとうとう、飼い犬を黒から茶色に変えたのにも拘らず、以前飼っていた犬の色までチェックされ「国家反逆罪」にされる事態にまで陥り、「俺」はもっと早く「嫌だと言うべきだった」と気付くが、ある朝、まだ夜明け前に家のドアが強く叩かれる。これが「茶色の朝」で、ここでこの物語は終わる。

作者はこの本を1998年に、特に若い世代に読んで欲しいと印税を放棄してわずか1ユーロで出版している。フランスで国家の危機が訪れた際に世に出し、本を読んだ多くの人々が「何をすべきかを考えよう」と立ち上がり、結果、保守派が極右と結びつくのを免れたのだ。

「茶色の朝」を迎えたくなければ、私たちは何をすればいいのか？それは「思考停止」をやめることだ、とこの本の最後に載せられたメッセージにある。私たち普通の人間にとっての最大の問題は、社会でファシズムや全体主義に通じる現象が現れた時、それらに驚きや疑問を感じながらも様々な理由を付けて「やり過ごしてしまう」事にある、と。では具体的に何が出来るだろう？

日韓の問題はここで取り上げるまでもないが、ドイツと日本の大戦後の取り組みの違いを考えると1つの答えが出て来た。1950年から西ドイツとフランスでは共同で歴史教科書を作成しており、ドイツが戦争中してきた事を事実として伝えようとしている。1960年代にはナチスの過去についての記述が増えている物が出版された。一方日本はどうだろうか。

今日本ではこれまでにないほど海外からの移住者が増えており、日本の大学や専門学校で勉強して日本で働きたいと考えている留学生も年々増え続けている。そこで、彼らが日本語を学ぶ日本語学校などで彼らが使う教科書に日本の戦争の歴史を踏まえた内容のテキストを、と提案している人がいる。学習者に日本がしてきた事をきちんと示したいという意志から来たものだ。この提案に何かアドバイスを、と問われているが今の私には何も思い付かない。何かいいアイデアがあれば是非聖公会生野センターにお寄せ頂きたいと願う次第である。

（ますやま　えつこ　川口基督教会信徒）

# 日韓、二つの近代

岡本 朝也

韓国と日本の関係のことを考えるとき、よく思い出すのは浅川巧のことです。山梨生まれでキリスト教徒でもあった彼は、朝鮮半島の文化に深い関心をもち、朝鮮総督府に就職して林業技師として働くかたわら、日常生活の道具である膳や陶磁器の研究を通じて朝鮮の文化や社会の素晴らしさを伝えることに努めました。その姿勢は、兄の友人であった柳宗悦にも影響を与え、それが民芸運動の端緒の一つになったといわれています。

浅川の著作を読むと、1891年に生まれ、1913年に朝鮮半島に渡った日本人である彼が、生活者の視点から、差別や経済優先の開発を批判する思想をもって、朝鮮の人々や文化に接していたことがわかります。浅川はキリスト教だけでなくトルストイの思想にも親しんでおり、明治維新からわずか40年で日本社会がこうした近代文明に対する反省の視点を獲得した人物を生み出していたことには驚かされます。そして、更に考えさせられるのは、浅川が文明批判の思想とともに植民地当局の一員として朝鮮半島におもむき、そこでの実践に影響を受けた柳が日本で民芸運動を展開するという関係が見られることです。私たちが「大正デモクラシー」と呼ぶもののなかには、朝鮮半島への植民地支配が含まれているのです。

19世紀の前半に西洋諸国が近代工業とともに押し寄せてきてから、東アジアの国々は新しい世界の情勢に対応しようとしてきました。現在の韓国や日本は、その結果として存在します。両国の社会、経済、政治の状況は格差の拡大や環境破壊などの問題も含み、そこに暮らす全ての人にとって素晴らしいものであるとはいえませんが、それでも、現在の人々の生活がその歴史の上に成り立っていることは間違いありません。

韓国と日本の友好にとっての試練は、この近代の歴史の大きな部分が日本による朝鮮・韓国への侵略と植民地支配からなっていることです。日本が朝鮮半島を植民地にしたのは、食糧や地下資源、労働力を利用し、更に軍事基地を設置するためでしたが、工業の下請けや市場として利用するために、あるいは移住した日本人の要求にこたえるために近代的な制度が必要になると、限定された形で学校や工場、経済制度の整備などを行いました。しかし、これによって韓国の人々にもたらされた利益はわずかで、多くの人は貧困に苦しめられました。また、義兵闘争やパルチザン活動、独立運動、戦争への動員などで多くの人命が失われたことも忘れることはできません。

日本による植民地支配とそれからの解放は、現代へとつながる韓国の歴史の一部です。そしてそれは、日本の近代史の一部でもあります。つまり、日韓両国のアイデンティティの一部にこの事実が組み込まれているのです。両国がしばしば歴史問題をめぐって深刻な対立に陥るのは、このためだといえます。かつての植民地支配にどう向き合うかは、世界の様々な場所で、支配を受けた国、支配をした国の双方にとって大きな課題となっています。答えを見出すことは簡単ではありませんが、私たちには誠実に問題と向き合うことが求められています。

（おかもと　あさや　大学非常勤講師・
未来のための歴史パネル展共同代表）





# マスコミと嫌韓報道

木村 元彦

週刊ポストが「韓国なんて要らない」という表紙の嫌韓特集を出した直後、テレビ朝日の「モーニングショー」から、ヘイト本について語って欲しいという出演依頼が来た。そのときに、念を押したことがひとつあった。「差別煽動本について、どっちもどっち論の構成ならば、協力しませんよ」。価値相対化主義で主張をぼやかすテレビ的な手法を見て来たからだ。「それはありません」ということで話をすることにした。

ところが、ところが。確かに私の出番では、ヘイト本がいかに社会を壊すかと言う話が出来た。しかし、その前のコーナーが、チョ・グク氏を「玉ねぎ男」と揶揄した批判である。「売れるからということで嫌韓本を出すというのは、どうでしょうね」と問われたので、「それはテレビも同じではないですか」と答えた。落胆は禁じ得ない。森友・加計問題を含めて日本の政治家について追及すべきことは、山ほどあるのに、視聴率のために嫌韓を煽る。局のリサーチャーの仕事をしている韓国や中国の留学生に聞けば、ディレクターに言われて母国の醜聞記事を集めて来るのが、日課だそうである。

ヘイト本がいかに社会を壊して来たか、その流れをさらっておきたい。

国会で安倍首相は在日韓国・朝鮮人の「特別永住権」について、「特権ではなく資格である」と答弁し、「生活保護優遇」についても厚生労働省は「国籍に関わらず同じ基準で判断しているので優遇の事実は無い」と回答している。代表的なこの二つを含めた「在日特権」は国によってその存在を否定され、デマであったことが確定している。

この事実無根の「在日特権」を最初に書籍という形で垂れ流し、ヘイトスピーチに至る流れを作ったのが、2005年に刊行された「マンガ嫌韓流」（山野車輪）である。2002年日韓W杯の際に韓国寄りとされる審判の判定が頻繁になされ、それに不満を持つ日本のサポーターのルサンチマンを晴らす現象も相まって市場に出回った。当時ジュンク堂の歴史書のコーナー担当の書店員への取材で、「何の本かも分からず、棚に入れられ、猛烈な勢いで、一度に20冊、30冊と組織買いがなされていった」という。しかし、このシリーズの実態は、多くの朝鮮近現代史の学者たちから記述の過ちを指摘されている通り、意図的な日韓基本条約の誤認で、戦後賠償問題を解決と断定する現在の徴用工問題に連なる歴史修正主義、在日の地方参政権を認めれば「県レベルでの乗っ取りも可能」と、ありもしない危機を煽る憎悪煽動本であった。このあたりのことは「さらば、ヘイト本！」（ころから刊）に詳細に書いたが、版元の晋遊舎の山中進編集局長によれば、「山野車輪氏は、最初はきちんとしたマンガ家になりたかった人物だが、物事を深く掘り下げるタイプでもなく知識はネット上だけ。嫌韓流はただネット上の流言を担当編集者がネタとして集めて山野に渡して書かせた」という。ハナから、裏も取れていない嫌韓の流言飛語をまとめた、デマの集大成であることを、発行人自身が認めているのである。

紙媒体が、お墨付きを与えて既成事実であるかのように瞬く間にネット空間に広まった。これを見た高田誠という人物が、本を出したいと晋遊舎を訪ねて来た。「ドロンパ」とだけ書かれた名刺を差し出したこの男は、それではダメだと編集部に諭されて桜井誠というペンネームを指南され「反日韓国人撃退マニュアル」を刊行する。これがザイトク会（注）の活動に連なっていった。

まさにデジャブを見る思いだった。私は90年代から、ボスニアやコソボの紛争地帯を取材してきた。ユーゴスラビア時代に民族融和をしていたこれらの国でどのようにして内戦が起き、崩壊していったのかを顧みると、ひとつの法則がある。歴史修正、フェイクニュース、そして差別煽動と分断である。今の日本は矜持なきマスコミがそれに加担している。それこそ今の日本が問われているのである。

（きむら　ゆきひこ　ノンフィクションライター）

注：ザイトク会
「在日特権を許さない市民の会」の略。
2007年から全国でヘイトスピーチをネット・街頭で続けてきた。レイシスト団体。

# 出会いの力

司祭 ヨハネ　古澤 秀利

時々、こんな声を耳にします。「あの人は○○人だから～だ」「こんなことをするのは、○○人だからに違いない」。また、ある出来事の中心人物や事件の容疑者に対して、特にインターネット空間で同じ表現が用いられているのを目にします。最近は日韓関係の悪化のためか、雑談でも韓国の話題になると「韓国の人は～だから」といった表現が用いられる、それは両国の関係悪化前より増えたように感じます。もちろん私の気のせいかもしれませんが。

私がお世話になっているある方から、お嬢さんの職場での出来事を伺いました。その方の娘さんは精神科で看護師をされているのですが、彼女の上司である看護師長さんがスタッフ間での申し送りの際、調子を崩している患者さんについて「△△さんは在日だから暴れると大変なので気をつけて」といった内容の発言をされたそうです。それまで「あの人は○○人だから～だ」のような表現を使うことが無かった看護師長の一言に、その患者さんと同じく在日韓国・朝鮮人である彼女の心は痛み・揺れました。しかし、ぐっと言葉を呑んだのでした。

ある人について「あの人は○○人だから」との判断は、一見するとその人を見ているようですが、その実、全くその人のことを見ていません。そこに居るのは、「○○人」と記されたお面を被った人でしょう。厳密にはお面を被らされた人であり、その人にお面を被せているのは「日本人」である「私たち」です。その人に被せてしまったお面を外して顔と顔を合わせれば、「○○人」との一言では決して表現仕切れないその人自身に出会えるはずです。

この9月7日に東京の渋谷と大阪の難波で「日韓連帯アクション0907」が開催されました。有志がインターネットで呼びかけて開催されたもので、参加者がリレー形式でマイクを持ち、聴衆に思いを訴えました。渋谷では参加者の一人である在日3世の女性が、震える手でマイクを持ち想いを語られたそうです。少し長いですが引用します。

「私は在日3世で、こうやって顔を出すのはできればやめたい。でも、そうは言っていられない。私は日本生まれ、日本育ちで、日本の学校に行ったので韓国語はしゃべれません。なので『韓国に帰れ』と言われても、帰れません」「『国から出て行け』とか『帰れ』とか言われても、私は一ミリも傷つきません。嫌がらせをしようと思って言ってくるんだと思うんですが、言われ慣れているので」「私たちはいま、生きるか死ぬかの瀬戸際にいると思っています。今の時代は、個人情報を簡単に渡せるので、突然いろんな人がやってきて、連れ出されて殺されるってことも想像しています」「それは私だけじゃなくて、在日の人みんなが少しは考えていることです」「そんな時代に、マスコミの人たち、日本人の人にお願いがあります。私は殺されても構いません。でも、私より若い世代、未成年、これから生まれてくる子どもがこの国で安全に生きていけるようにしてください」。

ここには「暴力的な在日韓国・朝鮮人」の姿はありません。ここにいるのは、勇気をふりしぼって手を震わせながら、自分と同じ立場に置かれている若者や子どもたちを守ろうとする一人の人間です。

私は、その人自身に出会うとは、その人の声を聴くことだと思っています。ときには聴きたくない声に直面することもあるでしょう。私たち「日本人」にとってその一つは加害の歴史かもしれません。でも「～な○○人」ではなく一人の人からの声なら、たとえ「目を背けたい歴史」であっても向き合えるのではないでしょうか。それが、人と人との出会いの力であると信じています。「二人または三人が私の名によって集るところには、わたしもその中にいるのである」。

（ふるさわ　ひでとし　大阪聖愛教会牧師）

（引用：Buzz Feed News 2019年9月7日）





聖公会生野センターの設立から③

# なんちゃってジャズバンド（NBJ）

by　よっちゃん

なんちゃってジャズバンドは2011年頃から聖公会生野センターで音楽好きの人が集まって主にジャズの演奏活動をして来たことから生まれました。メンバーの入れ替わりもありましたが、現在は、アルトサックス、ベース、ピアノ、ドラムスのメンバーで楽しく真剣に音楽活動をしています。

ライブ実績は生野地域を中心に大阪聖和教会「ちまたのライブ」、鶴橋本通商店街「つるのはしマルシェ」、生野区民センター「いくの平和まつり」、「アールブリュット展＆当事者ライブ」、KCC会館「猪飼野おとなの文化祭」などがあります。

ライブでは演奏者も聴衆も障がいの有無や社会的属性にとらわれず、差別のないフラットな関係で音楽を楽しむことを目指しています。Autumn LeavesやSpain、All of me、Blue bossa・・・。ほかにもたくさんの曲の演奏をしてきました。ジャズというとむずかしいというイメージですが、誰もが親しめるという願いを込めてバンド名を「なんちゃって・・」と命名しました。

メンバーを紹介しますとサックスとキーボードは聖公会生野センターの利用者の精神障がい当事者、ベース、はセンタースタッフ、ドラムスは地域の人、キーボードはわたくしよっちゃんです。

最近では、ジャズ以外の演奏もしていて、よっちゃんが作詞・作曲したものをみんなでCDにしました。CDのタイトルは『らてぃ～にゃん』（ラテン音楽好きのメス猫の意味）。ロックあり、フォークあり、レゲエあり、サンバあり・・・の楽しいCDとなりました。コーラスは生野区内のアジアハウス子ども劇団の子どもたちが花を添えてくれて、録音は聖公会生野センターで行い、玄人はだしの地域の人が音響を担ってくれました。

今年の8月にはセンターで『らてぃ～にゃん』の発売記念ライブも行いました。その際には、ドラムスの友人にもギターでサポートに入っていただき、近所の人だけでなく、大阪府下や兵庫県からも参加者が集まってくれました。障がい者というと「支援するもの」「支援されるもの」の関係がイメージされますが、このバンドでは「ともに楽しみ、ともに生きる」ことが自然と実践されていると実感します。それはきっと聖公会生野センターが「ともに生きる」というスタンスを持ち続けているからだと確信します。これからも音楽を通していろんな方々とつながっていきたいです。

CD「らてぃ～にゃん」
＊お求めは生野センターまで。

# クリスマス献金のお願い

主のみ名を賛美します。

当センターは住民の４人に一人が在日韓国・朝鮮人である大阪生野地域を中心として、日韓教会の交流、すべての人が大切される社会の実現をめざし福祉事業として在日高齢者や障がい者の居場所、障がい者の美術・音楽などの文化事業を行っています。また生野地域では行政や地域諸団体と共に「人に優しい街つくり」に取り組んでいます。

聖公会では大阪教区在日韓国朝鮮人宣教協働委員会、管区日韓協働委員会の働きを担っています。

これからも地域の中でのネットワークを大切にしながら、聖公会生野センターの働きが多くの人に支えられていることを感謝してやみません。

今後とも皆様のお祈りとご支援をお願いいたします。　　２０１９年　降臨節

## ＮＰＯ法人聖公会生野センター理事会

主教 磯晴久（理事長・大阪教区）／司祭 原田光雄（副理事長・大阪教区）／谷川誠（管区宣教主事）／司祭 岩城聰（大阪教区）／加納佳世子（大阪聖アンデレ教会信徒）／張聖子（聖ガブリエル教会信徒）／早川育子（こひつじ乳児保育園園長）／司祭 奥晋一郎（京都教区）／鈴木憲二（大阪教区後援会副会長）／司祭 奥村貴充（大阪教区）、司祭 ウイルソン　ウォーレン（大阪教区宣教部長）／呉光現（聖公会生野センター総主事）／長野泰信（監事 石橋聖トマス教会信徒）／熊取谷志郎（監事 岸和田復活教会信徒）

☆　クリスマス献金送金先　☆

○郵便振込　００９１０－１－３２１７８０　「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

＊振込手数料が高くなりました。貴重な献金ですので、できましたら郵便局のATMをご利用ください。また、ネットバンキングをご利用の方はそちらでお願いします。

○銀行振込　三菱ＵＦＪ銀行　東大阪支店　普通　４６５４９６５「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇ 正 会 費　　年額　1口　10,000円

◇ 後援会費　　年額　1口　　3,000円から

・郵便振替　00910-1-321780「聖公会生野センター」

◇ 自由献金・クリスマス献金

・郵便振替　00910-1-321780「聖公会生野センター」

・銀行振込　三菱UFJ銀行「特定非営利活動法人聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0002
大阪市生野区小路3丁目11番19号
TEL 06-6754-4356
FAX 06-6224-7856
E-Mail nskkikuno@gmail.com
http://www.nskk.org/province/ikuno
発行人：磯　晴久
編集人：呉　光現